

支局長からの手紙

「徳島で国際協力を考える会」（白石吉彦代表）という市民グループがこのほど徳島市に誕生しました。この呼びかけをしたのは県立中央病院の外科医師、吉田修さん（きよ）です。以前、青年海外協力隊の一員としてアフリカで診療に当たり、来春からNGO（非政府組織）の医師として別の開発途上国へ。

吉田さんの「相手国の住民の立場にたった草の根の援助活動」との訴えに多くの人が賛同したのです。

宮崎医科大学を卒業した吉田さんは、生まれ育った徳島で臨床経験を積んだ

後青年海外協力隊に応募。一九八九年四月、アフリカ南部の国マラウイへ。首都リロングウェの病院に五カ月間勤めた後、ゾンバという人口約百万人の町の総合病院に勤務しました。

吉田さんが

まず驚いたのは、手術室に

心電図のモニター装置がないことでした。これがないと手術中、患者の心臓が動いているかどうか分からないのです。手術の前にまず室内のハエをたいて回る始末。患者の体にかける布

草の根の国際協力

も穴だらけ。そんななかで一日平均三、四人の手術をこなしました。

そのうち幼児千人中五歳までに二百五十人が死亡（日本は六人）する同国の深刻さが分かってきました。感染を防ぐために田舎の保健所にワクチンを持っていくても、住民たちは受診になかなか来てくれません。保健に関する知識が乏しいためです。輸血に際して

エイズ検査をしますが、半数は使えませ

ん。エイズがまん延しているのです。

同国の医療レベルを上げるためには先進国の援助が必要です。しかしその援助に疑問を感じることも。リロング

ウェの病院の集中治療室にはイギリス製の呼吸器など新鋭機器が備えられています。でもベッドは空いたまま。機

器を使いこなせるスタッフがいないのです。「相手国の実情に沿った援助でなければ」吉田さんは痛感しました。

九一年四月帰国。昨年、岡山市に事務局を置くNGO「アジア医師連絡協

議会（AMDA）がソマリアなどで医療活動をしていることを知り入会。同会員らで編成する緊急援助チームのリーダーとして開発途上国へ派遣されることになりました。郵政省の国際ボランティア貯金から資金が繰り出される事業で来年一月に派遣先が決定。期間は四月から一年。

吉田さんは以前の経験からワクチンを受ける人を増やすため、「古着をあげるからワクチンを」と現地で呼びかけてみよう、と考えています。そのためには古着を日本で集めてもらわねばなりません。注射器が不足すれば日本から送ってもらう必要があります。

今年二十三日、徳島市内で開かれた「考える会」の初会合には看護婦ら約四十人が出席。同市内の近藤整形外科内に事務局（08866・54・6808）を置き、会の活動資金を得るためバザーを行うことなどが決まりました。「草の根の国際協力」への第一歩が踏み出されたのです。

（徳島支局長・井上 脩身）

ついでに